
真・恋姫十三国伝 BBW創世記

kkk

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真・恋姫十三国伝 B B W 創世記

【Nコード】

N 2 6 8 8 Z

【作者名】

k k k

【あらすじ】

かつて光り輝く3人のガンダムと4人の女神と4匹の獣が天から降り立った地、三璃紗。神話の『三候』と『四神姫』と『四聖獣』と呼ばれる彼らは協力して世界を平定すると・・・太陽と月と海と大地となつて世界を安定していた。やがて遙かな時が流れ・・・『三璃紗、闇に包まれるとき、』『三候』の魂やどりし輝けるガンダムと『四神姫』の力を受け継ぎし乙女、聖印たる玉璽と天の遣いの導きを受け、ここに闇を打ち払わん・・・『三璃紗神話』G記』より。後に『三国伝』と呼ばれる風雲豪傑の時代。これはあまたの

星の如く乱世に煌めき、熱き侠達と美しき乙女達の物語である。 B
BW 創世記編を参考にした小説です。 kkk スタジアム

呂布・貂蝉編 前編（前書き）

BBW創世記のほうを始めることにしました。これからもよろしく
お願いします。

PS2版の真・恋姫＋夢想の魏編をクリアしました。今回から呉
編をプレイします

ではまずネタが多かった呂布・貂蝉編からのスタートです

呂布・貂蟬編 前編

ここは？陽の玉座の間では馬騰ブルーデイスティニー3と馬騰（真名・董）と西涼軍が拘束されていた。その眼の前には霊帝ガンダム、董卓ザク、李儒シャッコー、張讓がいた

李儒シャッコー

「西涼反乱軍首謀者・馬騰に次ぐ！！朝廷に背き、三璃紗を混乱に陥れた罪により西涼軍は一同この場で斬首！！二人の馬騰は後日、引き回しの上牛裂きの荊に処す！！」

納得のいかない馬騰ブルーデイスティニー3と董は

馬騰ブルーデイスティニー3

「黙れ！！霊帝陛下！！騙されてはなりません、我らは決して反逆者などではありません！！」

董

「三璃紗を混乱に陥れた張本人は・・・そこにいる董卓なのです！！！」

それを聞いた董卓ザクと張讓は・・・

張讓

「乱心者が何かほざいているようですが・・・お聞き遊ばれましたか、陛下？」

霊帝ガンダム

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

馬騰ブルーデイスティニー3

「へっ……陛下……!!!!!!」

董

「そんな……」

董卓ザク

「くくく……見ての通りだ馬騰!!!!陛下はお怒りのあまりお言葉にすらないそうじゃ!!!!」

馬騰ブルーデイスティニー3

「董卓、張讓!!!!」

董

「貴様ら!!!!」

そして……

董卓ザク

「やれい!!!!」

馬騰ブルーデイスティニー3

「よ……よせええええええええええ!!!!」

董

「やめろおおおおおおおお!!!!!!!!」

兵士達によって西涼軍は惨殺されてしまった

董卓ザク

「ふははははははは！！思い知ったか偉大なる靈帝陛下に逆らうと
いうことはこういうことだ！！！！」

そして、馬騰ブルーデイスティニー3と董も連れ去られてしまった
のであった

朝廷での絶大な権力を手にした董卓は日に日にその暴虐ぶりを増し
・・・もはや靈帝ですら董卓の言うがままになっていた

呂布・貂蝉編 前編

翌日、ここは王允邸では・・・

張温シュツルム・ディアス

「もう我慢ならん！！こんなことになるなら西涼軍の鎮圧に向かう
べきではなかった！！」

丁原リグ・コンティオ

「張温將軍の言うとおりだ！！もはや董卓を生かしてはおけぬ！！
すぐにでも暗殺計画を実行に移すべきだ！！」

詠

「そうですね、そのおかげで同じ名前を持っている月が苦しめられ
ている者ですもの」

月

「こんなことしたくないけれど・・・陛下も困っていましたし・・・
」

何進

「ここは暗殺計画を立てるべきじゃ!!」

一同は董卓ザクの暗殺計画を立てると言うが……

王允ジオング

「だが、董卓は宮中の全権を掌握し、近づくことすらままならぬ……
我らだけでは……」

何進

「では党錮の禁で都を追われた蘆瑱將軍と司馬徽公を呼びもどして
はいかがかのう?」

王允ジオング

「いや彼らは追放されたのではなく自ら野に下ったと聞く今更朝廷
のためには動くまい……」

詠

「なら旧十常待達の討伐に活躍した名門袁家の力を借りれば……」

一同は悩んでいると……そこへ……

貂蝉キュベレイ

「お話し中失礼します。お父様、お茶の支度が整いましたが……」

月

「貂蝉さん……」

貂蝉キユベレイ

「なんだ、月達も来ていたのか？」

王允ジオング

「こちらに来なさい」

貂蝉キユベレイはお茶の支度を始めた

何進

「相変わらず美しいな貂蝉は……」

丁原リグ・コンティオ

「いや美しいだけではない、この佇まい……武芸の才も相当なものだ……どうだ王允殿、貂蝉をワシに預けて見ぬか？一流の女武將に育てて見せるぞ」

詠

「丁原將軍、またその話ですか……」

王允ジオング

「貴公には勇猛果敢と名高い養子達があるではないか……」

丁原リグ・コンティオ

「一人は武勇一辺倒すぎる……」
すると……そこへ……

恋

「義父様……」

丁原リグ・コンティオ

「おお、恋にねねか、どうしたのだ？」

恋と音々音が出てきた

恋

「この子拾った・・・」

恋の腕には一匹の子犬がいた

音々音

「ねねからもお願いします。この子を飼ってもよろしいのでは・・・

」

丁原リグ・コンティオ

「しかしな・・・うちにはたくさん動物が・・・」

恋

「・・・」

丁原リグ・コンティオ

「わ・・・わかった・・・その代わりに、ちゃんと面倒をみるのだぞ・

・・・」

恋

「ん・・・」

恋はうれしそうにうなづいた

丁原リグ・コンティオ

「もう一人もあのようにボヤっとしているが・・・本当は心優しいよ
い娘じゃ」

すると・・・貂蟬キュベレイはお茶の支度を止めた。恋も子犬を
音々音に預けた

王允ジオング

「ん？どうしたのか貂蟬？」

音々音

「恋殿？」

貂蟬キュベレイ

「恋・・・！！」

恋

「そこ！！！！」

貂蟬キュベレイと恋は武器を投げた。そこから密偵の兵士が現れた

張温シュツルム・ディアス

「こっ・・・これは！！？」

何進

「まさか董卓の・・・」

恋

「お前・・・何者？」

すると問い詰められた密偵は自らの首に短刀を突き刺し、自害した

貂蟬キュベレイ

「自ら命を断つとは……こやつただの密偵ではありません……」

詠

「まさか……董卓が……」

丁原リグ・コンテイオ

「他に誰がいる！！よもや朝廷の元老たる王允殿と月に密偵がついておるとは……事は一刻を争うぞ！！」

月

「……王允様……」

王允ジオング

「どうやら……我々も覚悟を決めねばならぬようじゃ……」

丁原リグ・コンテイオ

「ではいよいよ決行を！？」

月

「はい、今夜、宮中で西涼制圧の祝宴が開かれます……陛下の御前を血で汚すことは恐れ多いけど……全ては三璃紗の明日のためです」

そして、夜になり宮廷は祝宴が行われていた。王允ジオング、張温シュツルム・ディアス、貂蟬キュベレイ、月、詠は向かった

張温シュツルム・ディアス

「じつ……これは!!?」

詠

「あいつ!! 陛下の上座に!!」

そこには上座に座っている董卓ザクがいた

董卓ザク

「おお、王允殿に張温將軍、それから月と賈馱か……よう来たのう」

張温シュツルム・ディアス

「董卓將軍!! 靈帝陛下を差し置いて上座に陣取るとは……何と不遜な……」

詠

「そうよ!! それに気軽に月の真名をよばないでよね!!」

董卓ザク

「ああん? ワシと同じ名を持つものが呼べば、紛らわしいではないか……それにこれは陛下からワシへのささやかなお気づかいよ……
そつですな、陛下?」

靈帝ガンダム

「……」

張温シュツルム・ディアスと詠は怒りだそうとするが、王允ジオン
グと月に止められた

董卓ザク

「ん？王允殿が連れておるのはそなたの娘か？」

貂蝉キュベレイ

「はい貂蝉でございます」

董卓ザク

「おお・・・美しい・・・どこここへきて舞でも見せい・・・」

そして、貂蝉キュベレイは舞を踊り始めた。美しい舞を見せる。すると自らの扇で明かりが消えた

董卓ザク

「!!!?む、明かりが・・・」

貂蝉キュベレイ

「董卓・・・覚悟!!!!!!」

貂蝉キュベレイは決死の覚悟で董卓ザクを攻撃した。そして明かりがつけられると・・・そこには暗殺寸前であるが腕を掴まれてしまった貂蝉キュベレイのすがたがあった

月

(そんな・・・)

詠

(失敗したの・・・)

月と詠は向かおうとするが・・・

華雄ザンネツク

(待て、今行けば月様も囚われてしまう!!)

藍

(詠、月様をお連れして、逃げる!!)

詠は藍の言つとおりにして、月を連れて逃げた

董卓ザク

「フッフ……殺気まで美しい娘よのう……」

貂蝉キュベレイ

「くっ……」

王允ジオング

「貂蝉!!」

董卓ザク

「王允殿、陛下の前で狼藉を働けばどうなるか……知らぬわけではあるまい?」

張温シュツルム・ディアス

「かくなる上は!!」

張温シュツルム・ディアスは武器を持って董卓ザクに襲いかかろうとするが

董卓ザク

「愚か者め!!」

張温シュツルム・ディアス

「ぐっ……」

張温シユツルム・ディアスは董卓ザクが投げた短刀に刺さり、不意をつかれ……

董卓ザク

「華雄、胡軫!!やれい!!!!」

華雄ザンネツク、胡軫ギヤン

「はっ!!」

藍

「まつ……待て!!」

華雄ザンネツク

「すまん、このままおとなしくしているわけにはいかないのだ……」

華雄ザンネツクと胡軫ギヤンの二人に殺されてしまった。そして、兵士達は王允ジオングをとらえた

董卓ザク

「元老といえどワシに逆らうことは許さぬ!!王允を地下牢にぶち込め!!!!」

貂蝉キユベレイ

「お父様!!」

王允ジオング

「逃げる貂蝉!!」

貂蝉キュベレイは胡蝶を出して、逃げ出した

董卓ザク

「娘は逃げたか……」

李儒シャッコー

「いかがいたしましたでしょうか？」

董卓ザク

「放っておけ、しばらく泳がせて仲間も全てあぶり出すのだ」

李儒シャッコー

「御意にございます」

そのころ、貂蝉キュベレイは丁原邸にやってきた

貂蝉キュベレイ

「丁原將軍！！丁原將軍は戻られましたか！！」

すると……

恋

「貂蝉？」

音々音

「こんな夜中になんのようなのです？」

恋と音々音が出てきた

貂蝉キュベレイ

「恋か・・・一大事だ！！急ぎ丁原將軍に御取次を・・・」

すると・・・

???

「恋、誰か来たのか？」

恋

「奉先・・・」

すると、どこから武器が現れた。そして、鋭い瞳をした侠が現れた

呂布トールギス

「そいつは誰だ？」

音々音

「呂布殿、この者は王允様の娘の貂蝉殿です」

呂布トールギス

「ほう・・・親父殿はまだ戻っていないが部屋で待つか？」

貂蝉キュベレイ

「ありがとうございます・・・」

呂布トールギス

「陳宮、案内しろ」

音々音

「はい、ではこちらへ・・・」

貂蟬キュベレイは恋と音々音に話した

音々音

「なんですとー！！！？董卓への暗殺が失敗し、張温殿が殺され、王允様が囚われたですとー！！！！？」

貂蟬キュベレイ

「ああ、しかし、月と詠は何とか逃げられたから大丈夫だ」

恋

「よかった……」

すると……隣の部屋で酒を飲んでいたはずの呂布トールギスがやってきた

呂布トールギス

「恋、陳宮、酒が切れた。買いに行つて来い」

恋

「……わかった」

音々音

「では……貂蟬殿、しばしお待ちを……」

そして、二人は外へ出た。すると呂布トールギスは貂蟬キュベレイに近づいた

貂蟬キュベレイ

「あの何か？」

呂布トールギス

「フフフ……貴様は魂の声を聞いたことはあるか？」

貂蟬キュベレイ

「魂？」

呂布トールギス

「怒り、憎しみ、恐怖……人間の奥底に眠る魂の声が戦士の本能を突き動かす!!」

呂布トールギスは貂蟬キュベレイに口づけした

貂蟬キュベレイ

「無礼者!!」

呂布トールギス

「恐ろしいか……俺が……？」

貂蟬キュベレイ

「そ……それ以上近づけばただでは済まさぬぞ!!」

貂蟬キュベレイは胡蝶を繰り出すが呂布トールギスは構わず進んでいた

貂蟬キュベレイ

「いや……ああ……」

呂布トールギス

「そうだ……求めたのは……お前だ!!」

貂蝉キュベレイ

「いやあああああああああああああああああああ！！！！！！！！！」

貂蝉キュベレイの悲鳴は外にいる恋と音々音にも聞こえた

恋

「……………」

音々音

「恋殿……………」

恋

「空耳……………」

そして、翌日、？陽では…………

兵士達の行列が続いていた。その先には拘束された王允ジオングがいた

民

「おい、あれ……………」

民

「王允様じゃないか……………」

民

「朝廷の元老がこんな目にあわされるなんて…………三璃紗はどうなっ
てしまうんだ？」

そして、司令官が・・・

司令官

「者ども！！王允は董卓様の暗殺を謀った大逆族である！！董卓様に仇なすものはすなわち霊帝陛下に仇なすも同じ！！国家の逆族がどんな末路をたどるか・・・貴様たちもよく見ておくがいい！！！！」

王允ジオング

「ぐわあ！！！！？」

王允ジオングは鞭で叩かれてしまった。すると・・・丁原リグ・コンティオを見つけた。

そして、丁原邸では・・・

貂蝉キュベレイ

「お父様が・・・」

丁原リグ・コンティオ

「うむ、暗殺を謀った見せしめに都中を引き回しされてな・・・とても静止できるような光景ではなかった・・・」

月

「ひどい・・・」

すると詠が喋り始めた

詠

「それで丁原將軍はこれからどうなさるおつもりです？」

丁原リグ・コンティオ

「無論、董卓を打ち倒す！！だがその前に何としても王允殿を救いださねば！！」

貂蝉キュベレイ

「いけません將軍！！」

月

「貂蝉さん……」

貂蝉キュベレイ

「もとより父は命を捨てる覚悟で決起したのです！！父の志を無駄にしないためにも今は董卓を討つことに全てを……」

丁原リグ・コンティオ

「貂蝉……娘のお前が一番つらかるう……」

貂蝉キュベレイ

「覚悟ならできています……」

詠

「貴方の言っていることはわかるけど私達も王允様をほっとけないもの……」

貂蝉キュベレイ

「えっ……」

丁原リグ・コンティオ

「詠の言うとおりだ。父親を見殺しにしたとなればお前の心には一生消えない傷が残る。ワシはお前にそのような悲しい人生を歩ませ

たくない・・・」

丁原リグ・コンティオの言葉に貂蟬キュベレイは涙を流した。すると・・・

呂布トールギス

「親父殿・・・」

恋

「月・・・」

貂蟬キュベレイ

「!!!!!!」

呂布トールギスが来たことで貂蟬キュベレイの顔は青ざめた

丁原リグ・コンティオ

「奉先に恋か、どうかしたのか？」

呂布トールギス

「朝廷から出仕しると通達が来た」

月

「本当ですか・・・」

丁原リグ・コンティオと月は通達を呼んだ。すると・・・

丁原リグ・コンティオ

「こ・・・これは!!!!!!」

月
「そんな……」

詠

「董卓の奴、どうやら僕達に探りを入れてきたみたいね」

月

「貂蝉さん、顔色が悪いですけど大丈夫ですか？」

貂蝉キュベレイ

「いや……」

丁原リグ・コンティオ

「そう心配するな。ここにいれば安全だ。お前はここで待っていてなさい。恋、馬を用意しろ」

恋

「ん……」

そして、恋と丁原リグ・コンティオ、月、詠は部屋を出た

すると……

呂布トールギス

「なぜ本当のことを言わない」

貂蝉キュベレイ

「え……!？」

呂布トールギス

「父など見捨てて逃げ出したい・・・誰でもいいから今すぐこの身を抱いて欲しい。ふふふ・・・それほど叫んでいてはまる聞こえだぞ・・・」

貂蝉キュベレイ

「ば・・・馬鹿な・・・私は・・・」

呂布トールギス

「教えてやる！！貴様が求めているものは・・・自分が生きているという命の証だ」

貂蝉キュベレイ

「な、何を・・・」

呂布トールギス

「俺には分る。追い詰められたほどに昂る魂・・・貴様の奥底に燃え上がる浅ましい女の性がな！！」

貂蝉キュベレイ

「無礼な・・・」

貂蝉キュベレイは呂布トールギスの手を払った

呂布トールギス

「ふ・・・逃げ出しくば逃げればいい俺を殺したくば殺せばいい。己の魂の聲に殉ずる者だけが生きた証を手にする事が出来る・・・」

貂蝉キュベレイ

「魂の・・・声・・・」

すると……

求めたのは……お前だ

貂蟬キュベレイ

「違う……違う!!」

求めたのは……お前だ!!!

貂蟬キュベレイ

「違う!!!私……私は!!!私じゃない……私は求めてなどいない!!」

貂蟬キュベレイは泣き崩れた。そして、同時のその瞳の色が変わった……

そのころ

恋

「奉先……」

呂布トールギス

「なんだ、俺に何の用だ？」

恋

「貂蟬に何したの？」

呂布トールギス

「何故そんな事を聞く!!!お前には関係ないことだ!!!」

恋

「奉先の顔を見た途端、顔色が悪くなっていた」

呂布トールギス

「そんなに気になるなら、あの女に直接聞いてみたらどうだ」

そして、彼らは宮中に向かうのであった

呂布・貂蟬編 前編（後書き）

後編へ続く

呂布・貂蝉編 後編(前書き)

最新話です。しばらく不定期更新となりますがよろしくおねがいします。

呂布・貂蟬編 後編

己の魂の声に

殉ずる者だけが

生きた証を

手にする事が出来る

ここは？陽宮殿では董卓ザク、李儒シャッコー、張讓がある人物達の前に立っていた

李儒シャッコー

「さて貴殿らが何故ここに呼ばれたのかももうおわかりでしょうな？
丁原將軍にもう一人の董卓殿……」

それは丁原リグ・コンティオ、呂布トールギス、月、詠、恋、音々音であった

呂布・貂蟬編 後編

丁原リグ・コンティオ

「はて……何のことですかな？」

月

「おしゃっている意味が理解しませんけど……」

李儒シャッコー

「おや、ご存じありませんか？貴殿らが王允と張温と結託して董卓將軍を暗殺をたくらんでいる……とのうわさ……」

丁原リグ・コンティオ

「暗殺？これはまた誰がそのようなばかばかしい噂を……」

月

「そうですね。そもそも王允様とは花見の席でお会いして以来もう随分と……」

丁原リグ・コンティオと月はとぼけ続けるが……

董卓ザク

「聞こえておるぞ……」

丁原リグ・コンティオ、月

「「え!?!」」

董卓ザク

「それは真つ赤な嘘だと貴様らの魂が叫んでおるわ!?!」

張讓

「苦しい言い訳は無駄だぞ」

そして、兵士達は六人を囲んだ

李儒シャッコー

「逆賊、丁原!?!並びにその者達、潔く縛につけい!?!」

丁原リグ・コンティオ、呂布トールギス、恋は武器を構えた

丁原リグ・コンティオ

「ふ、ふふふふ……このワシを逆族と申したか……!!
うぬらごときに逆族呼ばわりされる筋合いなどないわ!!」

恋

「月……皆……下がってて」

丁原リグ・コンティオ

「死ねえ!!!」

丁原リグ・コンティオは董卓ザクに攻撃するが防がれてしまった

董卓ザク

「愚か者め!!!滅殺爆煉弾!!!!!!」

董卓ザクは必殺技を放った。そして……

丁原リグ・コンティオ

「奉先、恋!!!」

呂布トールギス

「御意!!!」

恋

「ん……」

三人は武器を構えた

呂布トールギス、恋

「双風！！」

丁原リグ・コンティオ

「迅雷！！」

呂布トールギス、丁原リグ・コンティオ、恋

「爆裂衝！！！！！！！！」

三人の攻撃で大爆発が起きた。

月

「きゃああああああああああああ！！！！！！」

そして、爆発がはれるとそこには大穴があいていた

李儒シャッコー

「ごごご無事ですか、董卓様、張讓殿！！」

董卓ザク

「ふふふ……さすがは戦慄の雷将・丁原！！老いたとはいえその力侮りがたいものよ。貴公らはすぐに奴らを追え！！」

張讓

「けして逃がしてはならぬぞ！！」

董卓ザクは部下達に探させた

藍

（我らはなんとかして月様達をみつけるのだ！！）

華雄ザンネック

(わかった)

すると……

董卓ザク

「それにしても丁原の連れていた二人……あの丁原と技を合わせる二人……あの丁原と技を合わせるとはただものではあるまい李儒、何者じゃ？」

李儒シャッコー

「二人とも丁原の養子で、確か二人とも呂布奉先と申しましたか……」

董卓ザク

「呂布か……」

張讓

「興味深いな……」

そのころ

藍

「月様、〴〵無事で……」

月

「恋さんが助けてくれたんです」

恋

「恋、奉先とお父様を追う」

詠

「そつね。早くしないと追手が来るわよ」

月達も合流して脱出することができたのであった。

そのころ、呂布トールギスと丁原リグ・コンティオは……

丁原リグ・コンティオ

「うぐ……ここは地下牢か……」

二人が落ちたのは地下牢であった

丁原リグ・コンティオ

「董卓を討ち損じたのは無念だが……月達と合流してここはいつたん退くぞ」

呂布トールギス

「……」

丁原リグ・コンティオ

「どうした奉先？」

すると突然、呂布トールギスは何かを感じ始めた

呂布トールギス

「親父殿には聞こえぬのか、この声か……」

丁原リグ・コンティオ

「声だと……？」

呂布トールギス

「聞こえる・・・魂の叫びが!!」

丁原リグ・コンティオ

「まつ待て奉先!!」

突然、呂布トールギスは走り出した

呂布トールギス

「どこだ・・・戦いを求める声は!!」

そして・・・呂布トールギスはたどり着いた。そこには・・・

呂布トールギス

「貴様らは・・・」

手枷をつけられている馬騰ブルーデイスティニー3と董がいた。しかし二人の体からは黒い気で覆われていた（董は茶色い髪が銀色に変わっており、表情も真の第二話の紫苑の表情のようなものになっていた）

馬騰ブルーデイスティニー3、董

「うおおおおおおおおおおおおお!!!!!!!!!!」

そこへ丁原リグ・コンティオがたどり着いた

丁原リグ・コンティオ

「奉先、今の声は・・・!!?!?!!?!?なぜ、馬騰達

「がここに……!?!」

すると……馬騰ブルーデイスティニー3と董は呂布トールギスに攻撃し始めた。その時に呂布トールギスの仮面の一部が砕かれた

呂布トールギス

「ぐっ……」

丁原リグ・コンティオ

「奉先!?!?……これは……まさか……闇の血か……!?!」

呂布トールギス

「闇……!?!」

丁原リグ・コンティオ

「本能を赴くままに戦いを求める闇の血族の伝説を聞いたことあるが……よもや馬騰達がそうだったとは……」

呂布トールギス

「ふふふ……面白い!!聞こえるぞ!!荒ぶる魂の声が!!」

呂布トールギスは馬騰ブルーデイスティニー3と董に向かった

丁原リグ・コンティオ

「奉先よせ!!いかにお前でも闇の力が相手では……」

呂布トールギスは馬騰ブルーデイスティニー3と董と互角に戦っていた。それをみた呂布トールギスは……

呂布トールギス

「ふふふ……ふははははは!!これだ!!これこそ俺の求め続けた物!!このむき出しの闘争本能!!たぎる!!昂る!!魂
ii!!」

その戦いを見た丁原リグ・コンティオは驚きを隠せなかった

丁原リグ・コンティオ

「奉先……お前は……な……何ということだ……あの姿
はまるで……地獄の修羅ではないか……!!」

そして……

丁原リグ・コンティオ

「やめる奉先!!!!」

なんと丁原リグ・コンティオは呂布トールギスの前に立ちふさがり、
重傷を負ってしまった

丁原リグ・コンティオ

「ぐっ……このままでは……じ……迅雷……大烈斬!
!!」

呂布トールギス

「何!!!!?」

馬騰ブルーデイスティニー3、董

「うがああああああああああああああ!!!!!!!!」

丁原リグ・コンティオは馬騰ブルーデイスティニー3と董に攻撃した

馬騰ブルーデイスティニー3

「ぐ……う……俺は……いつたい……董……大丈夫か？」

董

「あたしはなんとか……」

馬騰ブルーデイスティニー3と董は正気を取り戻したのであった

丁原リグ・コンティオ

「しょ……正気を取り戻したか……馬騰達よ……」

馬騰ブルーデイスティニー3

「丁原將軍！！これは……」

丁原リグ・コンティオ

「にげる……馬騰……」

董

「え……！？」

そして、それをみた呂布トールギスは……

呂布トールギス

「何故だ……邪魔をするなあ……！！」

丁原リグ・コンティオ

「ぐわああああああああ……！！！！」

董

「お前は!!?」

そのまま丁原リグ・コンティオを切り裂いた。二人は呂布トールギスの様子を見て驚いた

丁原リグ・コンティオ

「この者は……すでに人にあらず……戦神に魅入られた……
・修羅!!」

馬騰ブルーデイスティニー3

「修羅……!!?」

丁原リグ・コンティオ

「い……行け馬騰……貴公らにはまだ……為さなければ……
・ならぬ……ことがあるはずだ……」

董

「丁原將軍!!」

そして、馬騰ブルーデイスティニー3と董はどこかへと逃げ去った

呂布トールギス

「詫びは言わぬぞ……親父殿……」

丁原リグ・コンティオ

「ふ……見誤ったわ……ワシは……恐ろしい侠を生んでしまっ
た……!!」

というと丁原リグ・コンティオは意識を失った

月

「丁原將軍!!」

ついに会えることができたのであった

華雄ザンネツク

「いったい・・・どうなされたのだ!!?その傷は・・・」

丁原リグ・コンティオ

「奉先を・・・止めようとしたら・・・このありさまだ」

詠

「そんな!?!」

音々音

「それで呂布殿はどちらに・・・?」

丁原リグ・コンティオ

「奉先は先ほど王允殿を連れてどこかへと行ってしまった・・・」

月

「王允様を!!?!」

丁原リグ・コンティオ

「嫌な予感がする・・・はや・・・とめ・・・」

そう言いきる前に丁原リグ・コンティオは絶命した

月

「丁原將軍!!?!」

恋

「……恋は、奉先を追う。皆も、ここ離れた方がいい……」

恋はそのまま走り出した。

藍

「早くしないと追手が来ます。行きましょう」

詠

「わかったわ。月……」

月

「うん……」

そして、月達も呂布トールギスを追いかけ始めたのであった

そのころ丁原邸では貂蝉キュベレイは丁原リグ・コンティオの帰りを待っていた。すると物音を感じた。

貂蝉キュベレイ

「ち……父上……!?」

王允ジオング

「うっ……うぐ……貂蝉……!!」

さらにそこへ呂布トールギスが現れた

呂布トールギス

「丁原は……死んだ」

貂蝉キュベレイ

「お前は……そこまで……」

呂布トールギス

「馬騰を連れてこい」

そして、貂蝉キュベレイは扇を開いた

王允ジオング

「!?!? いかん貂蝉」

貂蝉キュベレイ

「父上……」

丁原リグ・コンティオ

『父親を見殺ししたとなれば心には一生消えない傷が残る。ワシはお前にそひのような悲しい人生を歩ませたくないのだ』

求めたのはお前だ

己の魂の聲に殉ずる

魂の……声に

貂蝉キュベレイ

「父上……私は……」

呂布トールギス

「そうか……お前も同じか……聞け!!!魂の叫びを!!!」

そして、一瞬で済んだ貂蝉キュベレイは王允ジオングの首をはね飛ばした

恋

「奉先……!!!?」

そこへ恋が駆けつけた。

恋

「……………」

呂布トールギス

「……………」

貂蝉キュベレイ

「……………」

そこへ

詠

「はあ……はあ……」

音々音

「恋殿、呂布殿も……王允様は……」

恋

「遅かった……間に合わなかった……」

藍

「何!!!?」

月

「いつたい・・・何が・・・」

すると月の足元に何かがあたった。それは王允ジオングの首であった

月

「!!!」

月はショックのあまり倒れてしまった

詠

「月!!!?」

華雄ザンネツク

「なんとということだ・・・」

音々音

「呂布殿・・・なんとということ・・・」

恋

「違う・・・」

音々音

「え!?!?」

恋

「恋は見た・・・王允様を斬ったのは奉先じゃない・・・」

呂布トールギス

「やったのは……この女だ」

呂布トールギスは貂蝉キュベレイを指差した。一同は驚いた

藍

「なんだと、自ら父を殺めたというのか!!?」

詠

「なんで……なんで王允様を殺したのよ!!?」

貂蝉キュベレイ

「聞こえたから……」

音々音

「え!!!?」

貂蝉キュベレイ

「魂の音が聞こえたから……」

藍

「どづいつことだ……」

音々音

「呂布殿、貂蝉殿に何を吹きこんだのですか!!?」

呂布トールギス

「勘違いするな。王允を斬ったのは……この女の意味だ」

貂蟬キュベレイは呂布トールギスの仮面を取った

貂蟬キュベレイ

「聞こえているとも……奉先……」

その後、月は董卓ザクと張讓の手によって牢屋に入れられてしまった

月

「なぜ……呂布さんと貂蟬が……」

月は悲しみをぶつけていたのであった

そうだ……

求めたのは……

己の魂に殉ずる者だけが生きた証を手にする事が出来る

貂蟬キュベレイ

「ならば例えこの身が滅びようとも……聞き続けよう……どこまでも共に堕ちていこう……」

月

「お二人を修羅の道から救ってください……」

貂蟬キュベレイ

「奪うがいい……求めるがいい」

月

「お願いします・・・これ以上罪なき人から何も奪わないで、この三璃紗は闇に包まれます」

貂蝉キュベレイ

「私は今・・・生きている」

月

「私は今、生かされている」

貂蝉キュベレイ、月

「この地獄の果てで!!」「」

月

「私は待っています。この三璃紗の闇を払う・・・光を・・・」

呂布・貂蟬編 後編（後書き）

孫策・周瑜編へ続く

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2688z/>

真・恋姫十三国伝 BBW創世記

2012年1月6日20時50分発行